

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01019

研究課題名（和文）朝鮮半島の内水面環境と水産資源の利用・採捕 - 朝鮮時代～近代を中心に

研究課題名（英文）The Inland Water Environment of the Korean Peninsula and the Catch and Use of Fishery Resources from the Joseon Period to Modern Times

研究代表者

森平 雅彦（Morihiro, Masahiko）

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号：50345245

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：朝鮮半島における内水面環境とヒトの関係史を構想する一環として、朝鮮時代～近代の内水面漁撈（生物資源利用行為）の様相を復元し、対象魚種と漁法、採捕施設の分布等に関する基礎データを構築した。

さらに、自然がヒトにもたらす「資源」と「障害」の多義性・相対性を捉える試みとして、権力機関による漁撈活動が地域住民の漁撈、漁撈以外の資源利用行為との間に複雑な相克を生み、水害などの障害をも及ぼした様相を明らかにした。またヒト中心の目線から脱却した環境史理解を模索し、アユの王室献上を素材として、多様な立場のヒト、多種にわたる非ヒトの生物種、その他の環境諸要素の「絡まり合い」が状況を生み出す様相を素描した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、未開拓領域が広がる朝鮮半島の環境史研究のなかでも、社会的注目にも拘わらず歴史研究の対象として等閑視されてきた内水面環境をめぐる問題の一端に初めて本格的なメスを加えるものであり、内水面漁撈の対象魚種、漁法、漁場分布などの基礎データを実証的に構築した。

さらに、これらをもとにした発展的議論として、（1）自然環境に発する「資源」と「障害」の、ヒトにとっての相対性・多義性を提示し、（2）漁撈活動をヒトと非ヒトの多種が「絡まり合う」なかに描出する視点を見いだしたことは、ヒト中心・ヒト例外主義的な環境史理解から脱却する方向性を模索する意味をもつ。

研究成果の概要（英文）：In this research, the researcher elucidated the fishing-target species and fishing methods of inland water from the Joseon period to modern times, as part of the history of the relationship between humans and the inland water environment of the Korean Peninsula. Furthermore, the researcher revealed the fact that the conflicts had occurred between fishing activities by authorities, local residents' fishing and non-fishing resource use, and the fact that the fishing activities by authorities caused harms such as floods. We can recognize what becomes a resource and what becomes a harm for human in nature are ambiguous and relative. In addition, for constructing environmental history that breaks away from a human-centered perspective, the researcher focused the donation of sweet fish (*Plecoglossus altivelis*) to the royal family, examined how humans, non-human species, and other environmental factors had been entangled.

研究分野：朝鮮史

キーワード：朝鮮史 環境史 内水面 漁撈

1. 研究開始当初の背景

環境問題が世界的課題となるなか、朝鮮半島では 2009～12 年に韓国政府が推進した大規模河川改修工事(四大河川再生事業)が、賛否意見の衝突する深刻な政治・社会問題に発展した。しかしこれに対する人文学知の応答は鈍く、議論の前提とすべき「朝鮮半島における内水面環境とヒトの関係の歴史」に関する知見が関係学界より示されることはなかった。日本と同様に韓国でも、内水面環境は、近代化の過程で治水・利水事業の高度化・広域化、食習慣や交通・物流手段の変化、産業化・都市化による水質悪化などに伴い、一般社会から疎外され、人々の生活感覚のなかで希薄な存在となり、ヒトの社会を扱う学問もこれをほとんど等閑視してきたのである。しかしかつては、利水、治水、漁撈、家事、交通・物流など様々な面で、内水面環境は多くの人々にとってごく身近な生業・生活の場であったし、ヒトの健康や安全に直結する与件であることは、現在においても何ら変わりがない。

こうした現状に対する問題意識から、報告者は 2009 年度よりこのテーマに関する予備的考察を進めてきた(基盤研究 B「朝鮮半島の水環境をめぐる社会・経済・文化の歴史的諸相(22320138)」同「朝鮮環境史の創成にむけた河川の管理・利用に関する総合的研究(16H03486)」いずれも研究代表は六反田豊)。そこでは、様々な形態の「資源」(水資源、生物資源、鉱物資源、エネルギー資源、空間資源、精神資源)と、「障害」(水害、干害、空間障害、有害物)とが織りなす内水面環境とヒトの諸関係を俯瞰する視座を獲得するとともに(図 1: 森平 2017)、朝鮮時代(15～19 世紀)の舟運や漁撈を素材として生業の現場における微視的レベルの「手つき」「ふるまい」がヒトと環境の関係を象徴する重要性を有することを確認した(森平 2013・2014・2017)。

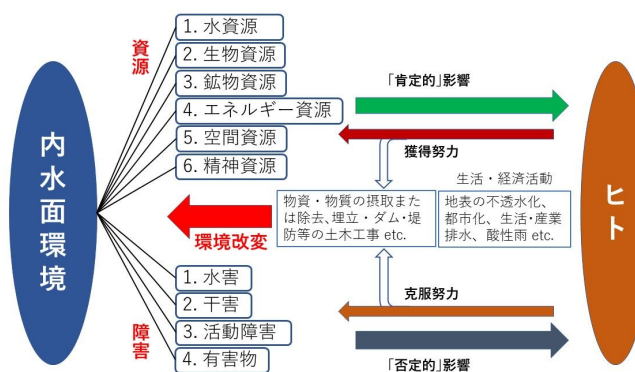


図 1 内水面環境とヒトの関係模式図

2. 研究の目的

以上の準備研究をふまえ、本研究では、今後、朝鮮半島における内水面環境 - ヒト関係の歴史について個別局面ごとに深層分析を展開する第一段階として、生物資源をめぐる問題をとりあげた。人類社会全体を見渡せば、内水面に産する生物資源には、きわめて多様な生物種が利用され、その用途には工芸や鑑賞・遊戯なども含まれるが、ここでは最も代表的な用途とその利用生物種として食用魚類に焦点をあてることにした。

日本と同様に朝鮮でも、海面漁業がその産業・経済上の価値から社会的に大きな関心を引くのに対し、内水面漁撈は、内水面の環境悪化や食生活の変化に伴い、現代では著しく衰退した生業となっており、内水面環境とヒトの懸絶が端的に現れる局面である。しかし前近代朝鮮の食生活において、淡水魚は、動物性タンパク源として軽視できない重みを有していた。そして幾つかの種には王室献上品としての政治性が付与され、また贈与、共食、祭祀、薬餌、道徳実践の媒体として、社会的、文化的、精神的に多様な意味付け、役割があたえられていた(森平 2017)。

本研究では、報告者の専攻する文献史学が主要な研究手段となる朝鮮時代～近代(15 世紀～20 世紀前半)を対象に、人びとが利用した淡水魚種、採捕に用いられた技法(漁法)という基礎情報を史料文献より収集して体系化することを主要な目標とした。何を食用とし、それをいかに価値付けするかは、当該種の多寡や在不在だけでは単純に決まらない、極めて文化的な現象である。そしてヒトによる自然環境へのはたらきかけの様式である漁法は、自然に対するヒトの認識や距離感を示している。これまでの漁業史研究でも、自然環境(魚種とその生態、生息環境)、漁法、ヒトの消費行動、背後にあるヒトの社会・文化は、単純にどれか 1 つが原因となって他を一方的に決定するのではなく、相互的・循環的な影響関係がそれぞれのあり方を流動的に生成し続けていくものであることが指摘されている。

本研究もそのような視座にたち、相互構築関係の全体像を読み解く前段階の基礎情報として、魚種と漁法の体系を明らかにすることを目指した。消費のあり方については次期研究課題において本格的な分析を加え、そのうえで全体を統合することとした。

3. 研究の方法

上記の目標を達成するために、対象時期の文献記録から可能な限り網羅的に事例データを抽出し、整理・分析を進めた。調査対象とした史料文献は、以下の～のような類型である。紙幅の制約により、文献名は代表的なものを例示するにとどめている。

朝鮮時代の政府・官庁記録...『朝鮮王朝実録』、『備辺司謄録』、『承政院日記』、『各司謄録』
 朝鮮時代の個人日記・文集...金垚『溪巖日録』、金光継『梅園日記』、李文樾『黙齋日記』
 朝鮮時代の地誌...『世宗実録』地理志、『新增東国輿地勝覧』、『慶尚道統撰地理誌』、『宣城誌』、『東国輿地志』、『輿地圖書』
 朝鮮時代の博物誌...徐有榘『蘭湖漁牧志』、同『佃漁志』、同『倪圭志』
 近代の学術記録...『韓国水産誌』、内田恵太郎『朝鮮魚類誌』、朝鮮総督府水産試験場の各種刊行物、各道の水産試験場報告書
 近代の地誌...『韓国近代邑誌』所収の各邑誌
 近代の個人日記・文集...李炳鯤『退修齋日記』、『求礼文化柳氏生活日記』
 近代の新聞記事...『東亜日報』
 近代の雑誌...『朝鮮之水産』、『開闢』

以上のような史料の収集・分析と並行して、史料に記載された魚種を特定し、漁法に関する記述内容を的確に理解するため、対象魚の身体・生態や漁法に関する学術知見を参照した。これは魚類学・生態学・水産学などの自然科学分野における知見と、民俗学・文化人類学の民族誌的記述中に見いだされる経験知・民俗知という2つの方向になる。後者については韓国・北朝鮮の民俗調査で報告された情報のみならず、比較参考のために世界各地の民俗事例に目を配ったが、河川地形や魚類相が相対的に朝鮮と類似する日本の情報がとりわけ有益であった。

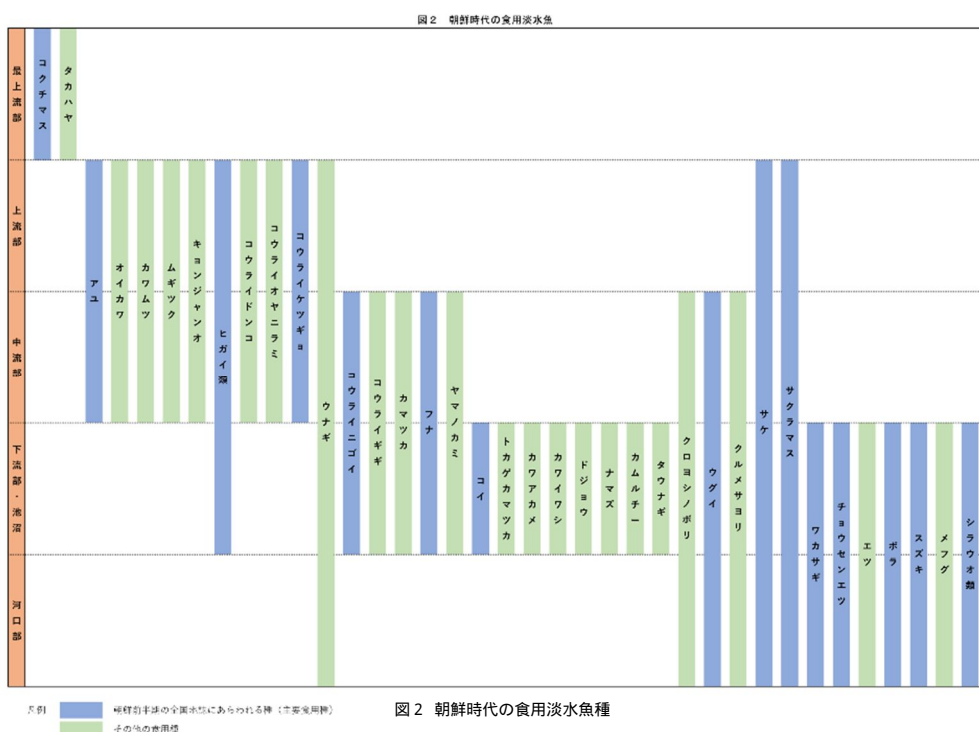
また本来、検討の焦点となる韓国内の個別地点について実地調査をおこない、河川地形など現場の状況を確認し、史料の記載内容との照合をおこなう予定であった。しかし研究開始と時を同じくして新型コロナ・ウィルス感染症のパンデミックが発生したため、訪韓調査は長期間不可能になった。そのため当初2019~22年度であった研究期間を1年間延長し、パンデミック収束後の2023年度にかろうじて1回の現地調査をおこなうことができた。ただ先行する準備研究のなかで実施した現地調査の成果を活用することで、少なくとも公刊済みの成果でとりあげた地点に関しては、現場確認を済ませた形をとることができた。

4. 研究成果

(1) 食用淡水魚種

朝鮮時代の食用淡水魚種のバリエーションを把握するため、以下の分析をおこなった(論文2021)。まず朝鮮時代の全国地誌(『世宗実録』地理志、『新增東国輿地勝覧』、『東国輿地志』、『輿地圖書』、『大東地志』)および朝鮮後期の学者徐有榘の『倪圭志』にもとづき、全国各邑(府・牧・郡・県などの基礎行政単位の総称)の物産として記録された淡水魚種を抽出した。また、同じく徐有榘の『倪圭志』に記載された全国各邑の場市(市場)の商品リストから淡水魚を抽出した。さらに、同じく徐有榘が著した魚譜(水生動物の博物誌)『蘭湖漁牧志』に記載された淡水魚のうち、食用にした事実、食味、採捕法のいずれかが記述されていることを基準として、食用魚種を抽出した。なお、海面と内水面の間を周期移動する通し回遊魚(アユ、サケ、サクラマスなど)と、海面と内水面にまたがって生息する周縁性淡水魚(ボラ、スズキなど)については、内水面や内陸部における採捕実績を確認できたものをピックアップした。

以上の作業により、史料的根拠をもって指摘できる朝鮮時代の食用淡水魚が37種にわたって判明した(図2)。これらは河川の河口域から最上流部まで、および池沼、水田・農業用水系な



ど人工水系に生息する諸種を幅広く含む。

また近代のデータとして、確認可能な地域や魚種の範囲は限られるものの、植民地期に朝鮮総督府水産試験場の技師であった内田恵太郎の著作（『朝鮮魚類誌』：ナマズ目・コイ目のみ収録、『平壤の川魚』：平壤地域の情報のみ）や『韓国水産誌』所載の水揚げデータ（ほぼ沿海部に限定）より当時の食用淡水魚種をさらに多数検出した。この時期については日本人が朝鮮に進出したことに伴って採捕・消費の傾向に変化が生じた可能性を考慮する必要があり、朝鮮時代に比べてウナギの漁獲が目立つことなどはその1つかと考えられる。

(2) 漁法

近代以前における内水面漁法として次のような内容が判明した（学会発表 2022・2023）。

網漁...木綿、絹、アカソ等を素材とする。長さのある建て網で魚を囲い込む、広さのある掬い網で掬い上げるといった方法がとられた。河川の下をあらかじめ別の建て網で仕切ったうえでおこなう場合もある。

漁梁（魚梁）...魚箭、防箭、防簾ともいう。日本でいう築である。木・竹・石等で障壁を築いて河道を遮断し、魚を陥穽装置に誘導したり、障壁の前に滞留した魚を採捕したりする。通し回遊魚をはじめ特定の時期に特定の方向に移動する魚種を主な対象とした。

魚毒...毒物を水中に投じて魚を麻痺ないし死に至らしめて採捕する。前近代の記録からは楸根（オニグルミの根）、椒皮・椒葉（サンショウの皮・葉）を利用したことが判明する。

刺突具...ヤスを用いて魚を突き捕る。

釣り...釣り針を用いる。エサを用いずに魚体にひっかける掛け釣り、釣竿を用いない形式もある。釣竿には竿先に糸巻きがついた、現在도 견치（キョンジ）という名前で知られる独特な形状のものもあり、朝鮮時代の風景画、近代の写真資料のなかにも確認できる。

魚巢...水温が下がる時期、木枝の束を水中に沈め、越冬のために寄り集まった魚を捕る。

棒打ち...浅場にいる魚を棍棒で叩いて捕る。

直捕り...水中の魚を手で直接つかみ捕ったり、水底の魚を足でふみつけたりして捕る。

手拾い...河川氾濫が収束した後に陸地に取り残された魚を拾い取る。

解放後の民俗事例としては、さらに多様な種類の漁網、その他の小型漁具、漁法が報告されている。日本の民俗事例と同種のものもあるが、日本の文化が一定に入り込んだ植民地期を経た後の情報であるため、その歴史性については慎重に調査する必要がある。

また上記の漁法のうち、漁梁については、15世紀後半の慶尚道における設置状況が体系的に判明する『慶尚道続撰地理誌』の記録にもとづき、各邑内における具体的な所在地を現地比定し、その立地が、対象魚種の生態はもとより、操業体制（地方官衙による運営）、他の生業活動（舟運）とも関係する可能性を指摘した（論文 2020）。

(3) 官営漁梁にみる「資源」をめぐる相克（論文 2022）

(1)(2)の検討が一定の成果をみたところで、生物資源の獲得行為である漁撈を、内水面環境におけるヒトの諸活動全体のなかに位置づける試みとして、朝鮮時代の洛東江上流部における官営の漁梁を素材とする発展研究をおこなった（図3）。

洛東江上流部において、地方官衙が経営する漁梁は、王室献上用に加え、官衙の財政補填をも目的とするアユ（銀口魚、銀唇）採捕のために運用されていた。秋になると産卵のため一斉に下流に下るアユを、河道を遮断して一網打尽にするため、ただでさえ濫獲傾向を伴ったが、加えて地域住民に対しては、しばしば禁漁措置がとられた。このため地域住民は内水面の生物資源から疎外されたが、住民側も規制をかいぐる動きをみせた。禁漁の影響はこれにとどまらず、朝鮮時代の地域エリートである士族たちが河川や河畔でおこなう各種の交遊活動や文化活動も、密漁の嫌疑を避ける必要から制約を受けた。河畔には士族たちの亭舎や書院、彼らが愛顧した樹木・岩石があり、交遊・文化活動の舞台となる内水面の景観の一部をなしていたが、それらが漁梁の建設資材として官衙により損壊されることもあった。これは士族が内水面環境を自らの空間資源・精神資源として利用することを阻害するものだった。また漁梁は河道を遮断する構造的な特性上、舟運を妨げる。これは水流や浮力（エネルギー資源）を用いて河川を交通路（空間資源）として、または船遊などの形で遊興（精神資源）の場を利用する行為を阻害するものだった。そればかりか、増水時には漁梁上流側の水位が押し上げられ、氾濫が生じる危険も生じた。漁梁の建設にあたっては、木・石やその他の資材、および労働力が住民から徴発され、負荷をかけていた。

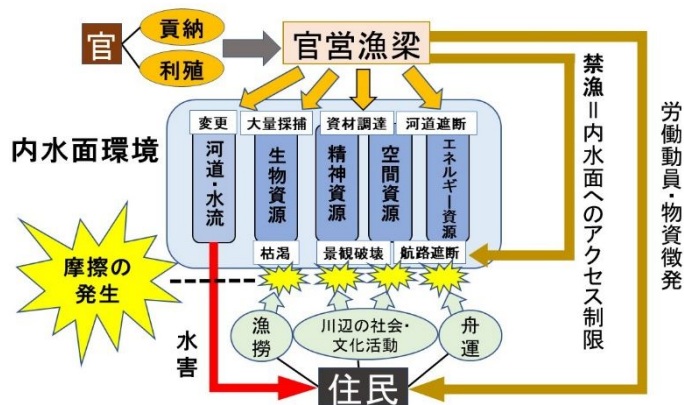


図3 官営漁梁をめぐる官・住民・内水面環境の相関関係

禁漁の影響はこれにとどまらず、朝鮮時代の地域エリートである士族たちが河川や河畔でおこなう各種の交遊活動や文化活動も、密漁の嫌疑を避ける必要から制約を受けた。河畔には士族たちの亭舎や書院、彼らが愛顧した樹木・岩石があり、交遊・文化活動の舞台となる内水面の景観の一部をなしていたが、それらが漁梁の建設資材として官衙により損壊されることもあった。これは士族が内水面環境を自らの空間資源・精神資源として利用することを阻害するものだった。また漁梁は河道を遮断する構造的な特性上、舟運を妨げる。これは水流や浮力（エネルギー資源）を用いて河川を交通路（空間資源）として、または船遊などの形で遊興（精神資源）の場を利用する行為を阻害するものだった。そればかりか、増水時には漁梁上流側の水位が押し上げられ、氾濫が生じる危険も生じた。漁梁の建設にあたっては、木・石やその他の資材、および労働力が住民から徴発され、負荷をかけていた。

内水面における生物資源獲得手段として当時最大の効果を誇った漁梁は、他者の生物資源獲得行為、他種類の資源獲得行為との間に幾重にも相克を生み、水害という障害の発生要因ともなっていた。内水面環境におけるヒトのある活動が「資源」を生むのか「障害」を生むのかは相対的な問題であり、多義性、複線性、重層性を帯びていたのである。

(4) 新たな発展研究にむけての視座

ここまでの研究を通じて、漁撈活動のヒトにとっての資源性を相対化し、障害性を含むその多義性に対する認識を得た。しかし内水面漁撈がヒトにとって多義的であるならば、非ヒトの自然環境にとってはどうなのか。内水面漁撈の多義性を、「ヒトにとって」という枠を外し、自然環境全体に押し広げて捉えていくことが、ヒト中心主義、ヒト例外主義的な視点を脱した環境史理解につながることに想到した。そしてその研究方法を模索するなかで、人類学の新潮流であるマルチスピーシーズ民族誌に注目するにいたった。非ヒトの多種に「ヒトとともに生きる存在」としての行為主体性を認め、それらとヒトが相互に「絡まり合っ」たがいの存在を創発する様相に着目するマルチスピーシーズ民族誌の発想は、方法上の違いからそのまま歴史研究に適用できるわけではないものの、内水面環境をヒトと非ヒトの多種が織りなす開かれた系として捉え、そのなかに漁撈をはじめとするヒトの諸活動を落とし込んでいくうえで、アイデアのヒントを提供してくれると考えられる。

そこで本研究の最終段階では、今後にむけての試論的研究として、朝鮮時代のアユの王室献上を素材に、権力者から庶民にいたる多様な立場のヒトと、漁具の製作、漁獲物の採捕・保存・運搬・摂食の諸過程に関わる動植物から微生物にいたる非ヒトの多種、および非生物の環境諸要素（気温、湿度、降水など）の「絡まり合い」の素描をおこなった（学会発表 2023）。そこでは、たとえばカイコの繭糸やアカソの繊維が漁網の素材となり、川で魚を捕るヒトの競合相手としてカワウソの存在が浮上し、魚をナレズシに加工する際に乳酸菌の力が利用され、魚の運搬にウマが使役され、保管・運搬中の魚にネズミや蛆がたかって食害し、魚についた寄生虫が魚を食べた人に病症を引き起こすといった具合に、多種による「にぎわい」が観察された。内水面の漁獲物に対する消費のあり方を含めて内水面漁撈の全体を統合していく次期研究計画では、マルチスピーシーズ的視点を基本的な方向性として定め、取り組みを進めていく予定である。

〔参考文献〕

- 森平雅彦（2013）「朝鮮後期における漢江舟運の運航実例から：「朝鮮半島の水環境とヒトの暮らし」に関する予備的考察（1）」『史淵』150
- 森平雅彦（2014）「朝鮮後期における漢江舟運の運航実例から：「朝鮮半島の水環境とヒトの暮らし」に関する予備的考察（2）」『史淵』151
- 森平雅彦（2017）「朝鮮における内水面水産資源利用の歴史に関する導入的考察：内水面環境とヒトの関係史のひとつとして」『年報朝鮮学』20

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 森平雅彦	4. 巻 259
2. 論文標題 朝鮮時代の洛東江上流における官営漁梁と資源をめぐる相克：礼安県の事例から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 朝鮮学報	6. 最初と最後の頁 35-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森平雅彦	4. 巻 158
2. 論文標題 朝鮮時代における食用淡水魚種の概観	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史淵	6. 最初と最後の頁 1-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/4372036	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森平雅彦	4. 巻 23
2. 論文標題 朝鮮前期の慶尚道における内水面漁梁の分布：『慶尚道続撰地理誌』の記録から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 年報朝鮮学	6. 最初と最後の頁 1-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森平雅彦	4. 巻 22
2. 論文標題 奎章閣韓国学研究所蔵『慶尚道続撰地理誌』の乱丁について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 年報朝鮮学	6. 最初と最後の頁 28-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 森平雅彦
2. 発表標題 朝鮮時代の内水面環境と生活・生業（韓国語）
3. 学会等名 Special Guest Lectures on Korean Studies from Invited Foreign Scholars, The Academy of Korean Studies（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森平雅彦
2. 発表標題 朝鮮時代の内水面漁撈とヒトの暮らし
3. 学会等名 東京大学コリア・コロキウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森平雅彦
2. 発表標題 朝鮮中期の洛東江上流域における「淡水魚生活」
3. 学会等名 朝鮮史研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森平雅彦
2. 発表標題 朝鮮時代の内水面魚梁：前・中期の慶尚道を中心に
3. 学会等名 九州史学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森平雅彦
2. 発表標題 朝鮮時代のアユ貢納と内水面環境
3. 学会等名 東洋史研究会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------